【論文】

「現代飢餓論」の序説的展開

樋口　貞三*

はじめに

現代は果たして「飢餓論」を必要としているか？　とりわけ日本という国を取り上げた場合についてはどうだろうか？「飢餓」という二文字を含んだタイトルの著作が数多く上梓されているなかにさらにもうひとつの飢餓論を加える意義はあるのか？　仮に意義あるとする場合、これまでの業績にくらべ意味ある特異性を表現することは可能か？　本稿の出発点においては、以上の疑問符に対してはいずれもイエスと答えられる、と述べることにおいて少しの躊躇もない。著者が構想している現代飢餓論は、ほとんど「総合飢餓論」と同義であるといえ、それは広範な課題を包含しており、包含しなければならない。少なくとも、飢餓論が今日的意義を持つならば、とりわけ日本というものを強く意識するならばである。

このように本稿は、今後かなりの時間と発表機会を想定しながら具体化されていく予定のもとで構想されている「現代飢餓論」の導入部を構成するものであり、そのため「序説」と題されている。しかし、厳密に言えば通常「序説」は「序論」と相違するという慣行があり、前者は主に方法論を中心にいわばメタ論理的な展開が特徴とならなければならない。本稿は、現代飢餓論としての方法論的問題に触れながら、主として論理のフレームワークとなるものについて述べ、あわせて重要課題として今後取り上げられていくものの意味と意義について考察しようとしており、この観点からは序論的要素をもかねている。

さて、上述のように、その内容はともかくも日本では「飢餓」が挿入されているタイトルの著作は多く、正確な情報の準備はなく想像となるが、発展途上国、先進国は問わず恐らく世界でもっとも多くの出版件数となっているように思える[1)]。それはあたかも「飢餓」という言葉自体に対する「飢餓」状態を示している、といいたくなるが事実、和洋書カタログ、図書館での検索あるいは大手書籍店の該当コーナーを訪ねてみれば容易にわかる。それは「飢餓」という二文字が付されているタイトルを持つ翻訳書は、ほとんどといっていいくらい原題からかけ離れたものが多いことを気づかせてくれることにも関連する[2)]。

＊当学科教授

翻訳書のタイトル的観点では『食料危機』というジャンルがあるが、これも同類項となっているようである[3]。ただし、原題に“famine”が含まれているものは近年顕著といっていいほどのものになっていることは注意してよい。後ほど、詳細に論議されることになるが、famineすなわち「飢饉」と「飢餓」すなわちstarvation間では厳密な区別を行っているのであり、両者を混同することは積極的に回避されなければならない[4]。いずれにしても、これは一つの社会状況あるいはもっと積極的に「飢餓シンドローム」と言えるように思えるのであり、そうすれば日本における「飢餓論」に対する飢餓性として、できるだけ精密な探求が行われなければならないだろう。したがって、「現代飢餓論」はこのような時代的背景から必然的に生み出された、といえるであろう。

1．現代飢餓論の意味と意義

日本における「飢餓シンドローム」は、当然のことながら食料供給機構に関しての不安から派生しているのであるが、それならばなぜ従来通りの「食料問題」というオーソドックスな取り扱いではなく、わざわざ「飢餓論」という展開が必要となるかについて説明を必要とする。つまり、単に飢餓シンドロームに対する批判的な検討を加えるというだけのものであるならば、飢餓論という表現は過剰なものであるといわなければならない。とりわけ最近では食料安全保障論が、新農業基本法制定に向けて審議を行ってきた、食料・農業・農村基本問題調査会答申書にも明確に取り上げられるなどという状況が見られ[5]、論議の方向性が明確になっているときにおいては、という意見もあろうかと思うのである。

このことについて筆者は結論的にはこう考える。「現代飢餓論」が試みようとしているものは、「飢餓」が単に「食料危機」や「食料供給不安」の代名詞あるいは強調用語として用いられるなかで、特に新規の情報注入がないまま結局は創造過程をともなわないトートロジーに過ぎないものであるにもかかわらず、重々しくもっともらしく展開される、いわば通俗的飢餓論とははっきりと識別されるものである、ということである。

2．用語的整理：飢餓と飢饉

言葉というものが有する大きな特徴である象徴性は、「飢餓」や「飢饉」にまとわりつく経済的、社会的、歴史的そして文化的諸問題を論じようとする場合、ややもすれば象徴性が本来持つ有益な力と方向性を、逆方向に導く危険性を孕んでいるように思える（N．Dowerは、famineは特別というふうにいっている。日本では「飢餓」は特別のようである）[6]。しかし、その言葉の象徴性に頼ることなくして、とりわけ言葉が意味しようとする対象が象徴としてのみ我々にまみえることがあることを考えれば、その利用を避ける過

剰な慎重さも、またそのリスクをもろともせぬ蛮勇もよしとすることはできない。とすればこの両刃の剣を注意深く利用するしかない。

飢餓論の意義を明確にするためには、国語的意味での類似用語そして大きく食料問題の領域内での関連用語について考察しておく必要がある。前者に属すものとして「飢饉」、「飢え」そしてもちろん「飢餓」が、後者に属すものとして「食料問題」、「食料（供給）不安」、「食料危機」、「食料安全保障」、などがあげられよう。なお、前者に含まれるいっそう象徴性を具備しているもう一つの言葉「凶作」があるが、作物生産の地域的低水準に関する用語であり、しかも学術的表現でもなくいわば「民間」に膾炙している用語といえる。

(1)　飢饉と飢餓

「飢餓」そのものを現代的シチュエーションで正面から論じている業績は、上述のようにきわめて少ないのであるが、一方、「飢饉」については最近主に欧米において出版が目立っているといえる。そこには二つほどの背景があるように見ることができる。そのひとつは、「飢饉」が「貧困」とのセットとして、発展途上国における食料供給の不安定性問題そして経済発展問題の一環として論じられているものである。こうした仕事の中心は、A. Sen、J. Drezeなどによるものであり、ごく最近、その集大成とも考えられる大著が編集された[7]。ところでこれらの原題はFamine and Poverty, Economics of Fameなどとなっていて、原題にあるfamineはそのまま「飢饉」と訳すことができる。一方、飢餓の訳語はstarvationという訳が定着していると考えていいだろう。

もうひとつの背景は、アイルランドのThe Great Famine（1845-）の150周年を記念したシンポジュウムの開催、関連著作の再刊・新刊が動機となっている。前者についてはH. O'Neillがあり[8]、後者については少なくとも筆者が手にすることができた再刊・新刊図書ですら二十冊を超えているのである。アイルランドの大飢饉については近年、新しい観点からの見直しも盛んに行われており現代飢餓論としても、重要課題として取り上げなければならないものである。とりわけ、飢饉や災害に関する記述におけるバイアス問題というものがあり、アイルランドにおいても歴史や経済史の専門家による再吟味が進行中である[9]。今後日本においても、同種の確認作業が不可欠のように考えられる。

飢饉と飢餓の関連あるいは相違という点について、その定義という観点からこの場所において明確にできる範囲で確認しておく必要がある。というのも、欧米では以下で観察するように、両者の使い分けは歴然としていると思われるが、日本ではこの点非常に曖昧なまま、場合によってほとんど同義に用いていることが多い。このような事態も大衆化された飢餓論発生温床にもなっているのでは、と思えるのである。さて、欧米ではこのことに

ついて、学術的なものとしてはA. SenやJ. Drezeが述べているのが参考になる。Senが自身の理論である食料のentitlement（利用権）論を説明するところで、バーナード・ショウを引用しているが、あわせて両者の相違についての考えがわかり大変興味深い[10]。starvation飢餓はfamineという自然的要因にもとづかなくとも、いわば経済・社会要因という人災性原因によって引き起こされ得る、ということを述べているわけである。

一方、直接的に行われる、定義らしい定義はfamineに関するものが多く、starvation飢餓についてその種のものは見つけがたい。後者は筆者の知る限り、辞書的解釈がそのまま生かされている。つまり、starvationは個人あるいは人間の主に食料に対する生理的な極度の不充足状態、場合によっては心理的それを意味する場合が多い。しかしfamineの場合は、急性的現象性、原因、そして程度が示される。このような観察からも明らかなように、欧米語表現（厳密にいうと英語表現であるが）においてfamineとstarvationが意識的に混用されることはまずありえないし、食料不安定性問題に関連してstarvation飢餓が明示的な見出しとなる場合はたとえば“Starvation in Etiopia”などのように、具体的な地名、人名そして出来事にまつわるケースとなっている。日本では、飢餓がこのような具体的状況を持たないままに用いられるのが一般的であることを思うと、両者間の用語法における相違はきわめて大きいと言わねばならない。

なお、ここで「飢饉」関連用語として「凶作」について触れておきたい。前述のように、「凶作」は作物主に水稲作の著しい低収量事態に対して用いられており、辞書的に言えば「豊作の反対表現」となっている[11]。しかし、この作物学上の通俗的表現であるこの言葉は、実際の用語法としては「飢饉」にまでは至らない、それよりは規模がやや小さい飢饉を表現しているように見える。英語圏では凶作に該当する普通名詞は存在せず、「凶作＝bad crop」という表現となると思われ、famineのように「状態」を示す言葉とは明らかに用法が異なっている。日本の具体例をみると、昭和初期の冷害期にはこの言葉が新聞紙上に頻発した。昭和五十五年や平成五年の大冷害に際してもしばしば目にすることができた[12]。日本の文献タイトルに関する限り、「凶作」という表現は明治以降の出来事について使われているのがほとんどである一方、「飢饉」は主に近世飢饉史などのように江戸時代までの史実について用いられている[13]。額面的に受け取れば、明治以降の日本では「飢饉」は発生していないということになるが。

(2)　食料問題関連用語と「飢餓、飢饉」[14]

「飢餓」の語法的なあり方を検討するためにまず「飢饉」との比較による関連性を見たのであるが、次に同様の趣旨で、日本における食料問題が“「飢餓」を必要としている”ので

はないか、という点を確かめてみたい。よく見かける見出しをあげてみるならば「食料問題」、「食料（供給）不安」、「食料危機」、「食料安全保障」、「食料（安全）神話」、「地球の人口扶養力」などがあげられる。率直にいって、これらの抽象性を特徴とする用語と、具体性を特徴とする「飢饉」との近縁性は希薄であるのは明らかである、といってしまえば論点先取の感がないでもない。というのもこの場合は、どこそこの飢饉という具合に具象性を特徴とする「飢饉」と、これらの関連用語の結合性は弱いという観察から逆にこれら一般用語の「抽象性」を引き出すという手続きになろうかと思う。それと同時に、一般名詞的特徴つまり抽象性を帯びている「飢餓」が、これまた一般的名詞である食料問題関連用語と結合力を高める理由も明らかになるのではないかと思う。

3．現代飢餓論の構成

さて、「現代飢餓論」の主要課題とはどのような内容となるか、そのいくつかは部分的ながら本稿で取り扱われるが、項目的に挙げると以下のようになる。①何故、「飢餓」が問われるのか？　②現代飢餓論の問い方　③飢餓発生メカニズムと発生可能性　④「飢餓耐久性」問題　⑤飢餓不安と忘却の共存　⑥過去・現在・未来における飢餓の形態と実体　⑦飢餓政策　⑧フードシステム的観点の飢餓問題、などである。

まず①「何故「飢餓」が問われるのか」であるが、発展途上国関連では頻繁に出現する「飢餓」が、日本という先進国において、しかも「食料問題」などというノーマルな表現を越えた「飢餓」表現が多出するのか、という問題について考えようとするものである。それは果たして「飢餓」の過剰表現であるのか、あるいは有意味な象徴性を示しているのか、などが考察されなければならない。このことに関連して、方法論的諸対策が講じられなければならないが、それは②において検討される。その特徴点は方法論的総合性であり、経済、社会、産業、文化、歴史、宗教などの分野からなる問題領域を抱える現代飢餓論に対応するものである。このような観点から、現代飢餓論を総合飢餓論と呼ぶことも可能である。③飢餓発生メカニズムは従来はA. Sennなどを中心とする経済学的業績があるが、これらはすべて非先進国を対象とするものであり、先進国段階の飢餓あるいは飢餓関心についてはまったく対象外とされている。また、方法論的にも経済学的方法が横溢しており、現代飢餓論的観点からの不備を感じるのである。

④「飢餓耐久性」はまったく新しい概念であり、本稿においても論じられているが、飢餓発生メカニズム問題とは両輪を形成しながら、現代飢餓論を牽引していくことになろう。

⑤の「飢餓不安と忘却の共存」は日本型飢餓論における課題として、かなりの考究エネルギー配分を要求されるものになるはずである。この課題解明にはとりわけ経済学分野外

からのアプローチが有効と思われるが、本稿においても取り扱われている。

⑥「過去・現在・未来における飢餓の形態と実体」も大きな領域をしめる重要課題である。過去における著名な内外における飢餓（飢饉）事例は、災害というものにともなう必然的な過大被害データが歴史的に蓄積されていき、それとともに文学などの情緒的表現によって増幅される傾向がある。日本における近代冷害史においても例外ではない。「現在」の問題はおそらく「未来」の問題と関連しつつ先進国型の飢餓問題を考察する上でわれわれの強い関心を引くところのものである。とりわけ「未来」についてはペシミズムが渦巻いている状態であるが、予測あるいは予想される「実体」にともなうペシミズムと、現在において予測あるいは予想するものを規定する歴史や文化から発するペシミズムとの関連を明らかにしなければならない。関連して、⑦飢餓政策では、とりわけ⑥の「過去」の事例分析を用い、しかも現代的あるいは先進国的飢餓の特徴にもとづく政策論が展開される。

⑧では、歴史的に進化するフードシステム、という観点に基づきながら、「飢餓」と「食料」の関係を探求すると同時に、システムとさまざまなプロセスから構成される現代のフードシステムにおける「飢餓」発生要素・要因の解明作業が行われる。とりわけ、平成5年の大冷害、別称「平成の米騒動」と平成7年の阪神・淡路大震災にともなうフードシステムの機能障害と対策についての研究は重要事項である。

4．比較飢餓論の立場から：日本型飢餓論の特異性

(1)　食料問題に関連した三つの類型

食料問題のあり方を先進国型と発展途上国型に分類することは、農業経済学における農業問題の取り扱いに関する伝統的な方法であり、一定の条件のもとで現在においても有効であると考えられる[15]。すなわち、先進国型を食料自給国型と輸入国型に再分割するのであるが、もちろんこのやり方はオーソドックスな経済発展･成長論の枠外である。しかし、食料を中心とする国際経済（政策）問題を考える上で、必要な論理枠と考えられる。

こうした観点では、日本はもちろん食料輸入型先進国群に入るとしても、NIES諸国を先進国群に含めるかどうかについては問題があるところかもしれないが、食料問題という範囲ではそれほど違和感はないし、適当な処置と考える。そうすると、欧米の先進国諸国が前者に、日本、韓国、台湾などのは後者に入る。しかし、ここでは比較飢餓論という観点からの議論をすすめるため、そのサンプルとして後者は日本を意味するものとしよう。

(2)　日本ではなぜ「飢餓」がよく話されるのか

「飢餓」が発展途上国の問題として話題となることにおいて、それがとりわけ変わったできごととは考えられないが、先進国においてそれが取り上げられるとすれば「人が犬を咬んだ」ニュース程度の話題とはなるはずである。食料自給型先進国で一時的な「飢餓」が自国の問題として取り上げられるケースは、遅くとも二十世紀に入った段階では皆無であろう[16]。日本という、世界一、二を争う経済大国で、後ほど詳細に吟味するように「飢餓」不安から逃れないままに「飢餓」という言葉が顕現化している、という事実は、自給型先進国の観点からはおよそ想像し難いものであるはずである。なぜかくも「飢餓」が語られるのか。日本のきわめて低い食料自給率に基づく食料供給不安とレスター・ブラウンなどの影響力をもつ権威が力説する長期的な食料需給バランスの崩壊予想によるものである、という理由付けが可能であろう。しかしこれのみではあまり説得力を持たないのは、シンガポールなどの超低自給率国において、「飢餓」が語られるだろうかということである。厳密な資料的吟味はこれからだが、今後その他のNIES諸国の事例を検討する必要性を指摘しながら、とりあえずここではそれを仮説として提示しておくにとどめよう。

問題はしかし、このような“反省点”が正しいとすれば、「飢餓」を語る意義はなくなるのか、ということである。そうではない。飢餓が語られる状況の安易さがそのことによって、本来有意義な（堅実な、といってもいい）飢餓論のニーズを弱めてはならないということである。筆者の仮定は、「どちらかというと安易な飢餓論が、それもしばしば現出するという日本の現実がある。このことを説明するものとして低自給率という要素は十分ではない。もっと本質的な要因がある、と考えるが、その本質的要因は日本の歴史と文化にある。そして通俗的な自然環境決定論的説明の効果は部分的でしかない」となる。この仮説について検討する前に、「堅実な意義ある飢餓論」のあり方について考えてみたい。

(3)　堅実な意義ある飢餓論の必要性：山折哲雄の「「２つの飢餓」論」

宗教学者の山折哲雄は、レスター・ブラウンの『飢餓の世紀』[17]と荏開津典生の『「飢餓」と「飽食」』[18]を比較しながら、両者における「飢餓」の取り扱いを「飢餓」についての「２つの立場」という観点から検討している。そして両者間の共通認識を識別した上、さらに“レスター・ブラウンは何か重大なことを忘れているのではないか”という批判表現を用いながら、荏開津の立場を強く支持している[19]。ブラウンの予測として、将来の人口爆発と食料供給力停滞によって一人あたり穀物量が年間200kgという「インド水準」に低落する、ということに対して山折は「インド並みの年間200kgという数字を、かれはわれわれの面前につき出し、いわば恫喝の道具に供そうとしている。…レスター・ブラウンのこ

の認識の底には、明らかに天国はアメリカ新大陸の方面に存在し、それにたいして地獄はインド旧大陸に残存し、日没を迎えようとしているという戦略的なイメージが揺曳しているといえないか。」[20] と批判しさらに、インド的姿とアメリカ的姿の二点間をつらぬく垂直線に替わりいくつかの補助線が必要であるとする。そして「「飢餓」に関する思想的課題もまた歴史や文化の相違に基づき、それぞれ固有の気候や風土条件に左右されている」ことを認識している荏開津の立論を正当なものと認めている。

(4)「飢餓」観の宗教学的背景

日本において何故にかくも“「飢餓」が好まれるのか”ということについては上述のように、日本が置かれている食料供給不安定構造という“通俗的説明”を越える必要があるとしたが、その要請に答えることができると思われる論理枠に遭遇したのは幸いであった。それは実は、山折哲雄の別論文のことである[21]。この論文の目的はタイトルが暗示するように、「私自身究極の飢餓に襲われるようになったとき、その飢餓状態の中からはたして救われるのか、飢餓からの癒しという奇跡をを手にすることができるのか」[22]、という重い課題にどう答えるのかということにあるが、この課題自身は本稿にとって直接の関係はない。山折がこの課題を考察するに当たって、その論究プロセスの中に取り入れている一つの仮説が筆者の体系構築にとってきわめて大きな意義を持つものであった。

山折は、「われわれ」と「西欧」とのあいだでは、「「飢え」というものに対する考え方に根本的な相違が認められる」という思いに至る理由として、「飢え」を具象化したものとして「餓鬼」があり、それは飢餓人間を意味するものであること、そしてこの「餓鬼」がキリスト教文化圏には見られない、という観察を示している。そして、「飢餓的人間に対する厳格な注視を怠らなかった仏教、それに対して飢餓的人間像をかぎりなく抑圧しようとしたキリスト教」[23] という山折の表現を筆者なりにもう少しかみ砕きそして整理して述べてみる。まず仏教における死生観としての「六道輪廻」[24] のうち、とりわけ中世日本人の心をとらえたのは「地獄」と「餓鬼」であった。一方、この「二道」のうち、「地獄」の方はありとあらゆる宗教に見られる「超歴史的な原型イメージ」をもつものであるが、「餓鬼」はそこには見られないこと、それにくらべて「餓鬼」というステージは「むしろ地域的文化的に限定される性質をもつイメージであったのははなはだ興味深いこと」というのである。かくして、仏教文化圏における「飢餓」に対して同一役割を持つ観念はキリスト教文化圏において欠落していることになる。山折は仏教および仏教文化そしてキリスト教およびキリスト教文化における論証考証を綿密に展開しているが、本稿にとってその部分は省略してかまわないものである。以上を構造1としてまとめてみる。

構造１　仏教文化圏とキリスト教文化圏における「飢餓」を中心とした死生観

仏教文化圏の死生観：　生・・・・・飢餓・・・・死……餓鬼、地獄

キリスト教文化圏の死生観：　生・・・・・・・・・・・・死……地獄

この表では何げなく「飢餓」を現世の位置に置いている。それなりにすでに自明のようにも見えるが、しかし厳密に言えば自明とは言えないのであり、さらに吟味する必要がある。日本で「六道輪廻」の思想が定着したのは源信によるところが大きく、平安時代における浄土教思想が確立したのであったが、死後の「餓鬼」の恐怖の実感は当然生存中の飢餓体験との共振によるだろう。対応策のない農業気象的異常や地震などから生じる飢餓、その不安は源信の教えの中に正確に投影された。一方、西欧中世期にはペストが跋扈し宗教戦争が多くの人命を奪ったが、その状況はまさに“生か死”かであり、中間的ステージとしての「飢餓」が入る余地はなかった。また、比較災害論の観点から河田恵昭は、西欧におけるペストと日本の自然災害である天変地異が、それぞれの精神構造に大きな影響を与えた、という作業仮説を立てている[25]。構造１に対するこのような新たな条件を加味することによって、構造２のように「餓鬼は現世における「飢餓」との対応が明確となる。

これをさらにシンプルに表現したものが構造３である。

構造２　「餓鬼」の現実的「飢餓」との対照

自然災害←←←←←←←←←

↓　　↑

仏教文化圏の死生観：　生・・・・・飢餓・・・・死……餓鬼、地獄

キリスト教文化圏の死生観：　生・・・・（飢餓）・・・死……地獄

↑（飢餓の追放）

ペスト

構造３　三ステージ構造（仏教文化圏）と二ステージ構造（キリスト教文化圏）

仏教文化圏：　［生－飢餓－死］

キリスト教文化圏：［生－（　）－死］

この枠組みでは自然災害とペストという病気の役割には相違はないとしていいのは、西欧におけるペストが人々にとっては全く自然災害と同じ意味を有していた、と比較災害論的観点から論じている河田の論述を援用できるからである[26]。したがって、上図の解釈の中心はやはり宗教的影響という点におきたいのであり、上述のように宗教的観念が現世に写像される装置として自然災害やペストがあったと考えたい。なお、以上の考察のなかで、西欧における「飢餓」の欠落というものが、この世における飢餓の現実が無かったということでないのはもちろんである。対策も為すすべもないペストの恐怖に向かうとき、

ペスト蔓延前にもしばしば発生していた飢饉による飢餓とても、比肩できる恐怖は与えなかったであろう[27]。「ペストによる「死の勝利」は人間における私欲や偽善の息の根をとめるテーマを展開しただけではない。飢餓の追放というもう一つの黙示的な主題を内包する」[28] のであり、「飢餓」が存在しても「死の勝利」の旗印の陰になる。しかし、この括弧内には新たな「飢餓」つまり「身体の飢餓」に対応する「魂の飢餓」が挿入されることになる。

以上の考察を整理するとき、比較飢餓論の観点から、仏教文化圏としての日本とキリスト教文化圏の西欧について、前者の自然災害と後者におけるペストを取り込みながら構造表現をすると「構造４」と、それに「構造３」を埋め込んだ「構造５」が以下のようになる。以後、構造４は、比較飢餓論的構造の「三要素結合」と呼ぶことにしよう。

構造４　　比較飢餓論的構造（その一）

［日本・自然災害・仏教］

［西欧・ペスト・キリスト教］

構造５　　比較飢餓論的構造（その二）

［日本・自然災害・〔生－飢餓－死〕］

［西欧・ペスト・〔生－（　）－死〕］

ところで「構造４」は《日本・西欧》、《自然災害・ペスト》、《仏教・キリスト教》という三つのファクターを組み合わせたもののなかから取り上げられた二つの事例に過ぎない、という考え方もできる。たとえば、［日本・ペスト・仏教］という仮想的な構造について、新たにその意味を探索する方法もあるが、スペースの都合から省略する。

５．飢餓不安と飢餓忘却

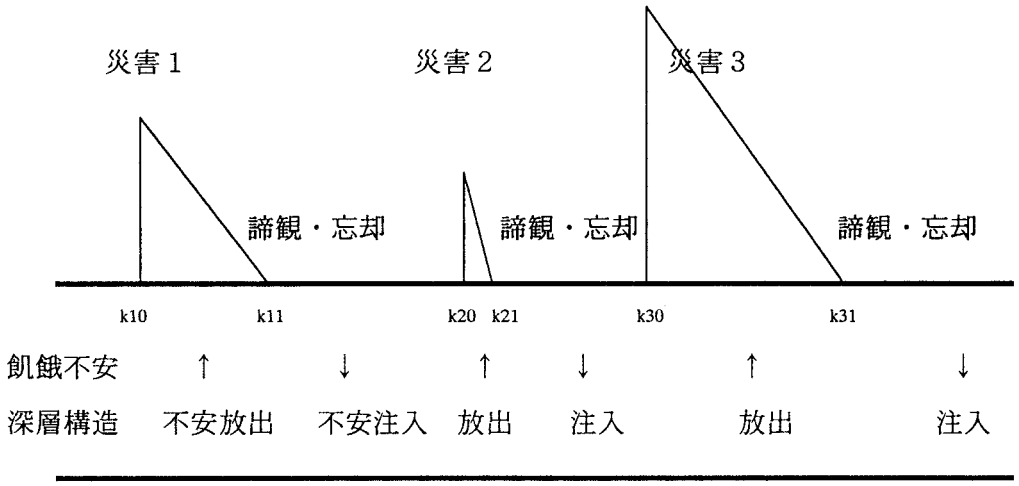
「飢餓」構造について考えてきたが、その基礎にある根元的な飢餓不安を否定の要因でありながら、かつ相乗的増幅効果をもたらしている「飢餓忘却」という側面について検討してみたい。しかしここでの課題である「飢餓不安と飢餓忘却」は、より一般的な命題である「災害不安と災害忘却」の部分を形作っているものである。まず、阪神・淡路大震災の徹底的な記録を図った外岡秀俊『地震と社会（上、下）』[29] からの引用から始める。

「欧州はペストを通じて、死を銘記し、災害の惨禍を伝え、被害を防ぐ独自の文化を作り上げた。その集団的な記憶の集積は、いわば災害に対する社会の伝承の「保水力」を高め、過去の災害体験を容易に水に流したり、風化することを防いでいる。社会全体が、記憶を喚起する装置となっているという意味で、欧州は記録を伝統とする社会なのだといえるかもしれない。それとの対比で言えば、この国で培われたものは「ゆく河の流れは絶えずし

て、しかももとの水にあらず」とする美意識の方だった。‥震災であれ戦災であれ、この国の災害実録が「酒のさかなにかたりつがれるだけ」に終わりがち（である）。」[30]

このような二つの類型化が外岡によって行われる一方、先に引用した河田は、西欧におけるペストと日本の自然災害である天変地異が、それぞれの精神構造に大きな影響を与えた、という作業仮説を立てていることにも合わせて注目したい[31]。われわれは日本人の深層に常に伏流水として流れている「飢餓不安」について、山折の仮説を援用することによって分析したのであるが、そこには西欧文化圏とは著しく異なる日本型類型が存在しているということが示された。しかしその一方、上で引用したような日本人に見られる「飢餓忘却」というあり方に向かうとき、「飢餓不安」との関係をどのように考えればいいのか、という問題に遭遇することになる。以下、この点について検討してみたい。

ペストによる圧倒的な「死」というものの襲来が、日本式の無常・諦観という性格とはほど遠い「災害文化」を創造した、ということについて、「それぞれの精神構造に大きな影響を与えた」という河田氏も、決定的な解釈には至っておらないと思う。飢餓不安構造と飢餓忘却の関係についてはとりあえず、下図のようなイメージとして示すことができる。

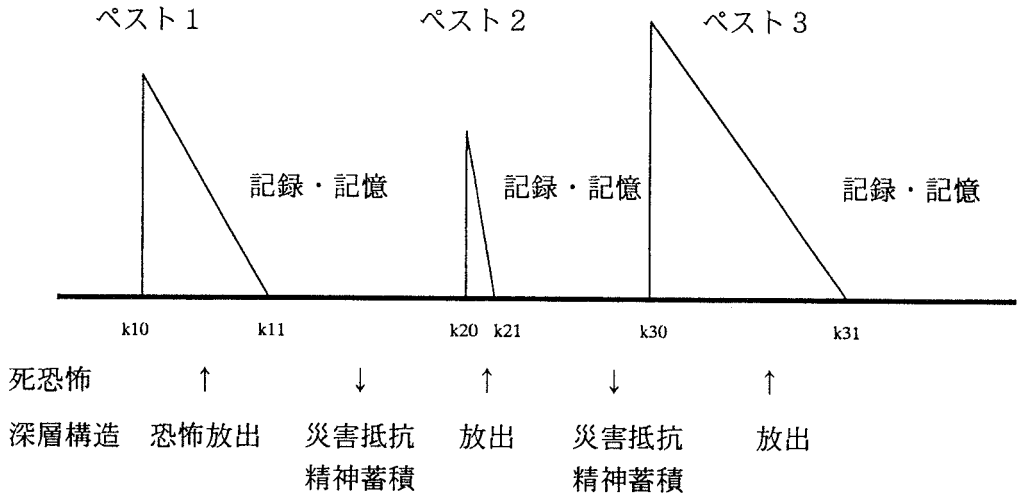


仏教文化の影響による「生－飢餓－死」という三ステージ構造に立脚するとき、飢餓不安・飢餓諦観（忘却）という状況への理解を深めるためには、河田の作業仮説が仮に有効であることがわかったとしても、その自然現象と精神構造関係だけでは不十分である。上図のように山折の二類型仮説を「飢餓不安深層構造」という役割で示すことが必要となるように思う。

飢餓不安・飢餓諦観（忘却）状況図について説明を行おう。まず、飢餓不安深層構造における伏流水としての「不安の量」は大きな自然災害発生が無い場合は一定量とする。こ

れは歴史的スケールで存在するものであり、量において不変、少なくとも繁く変動するものでない、と考えるのは妥当であろう。自然災害による現実的な飢餓の発生は、この「不安」を減殺することになり、つまり図の「不安放出」状態が生起する。しかし飢餓状態がやがて緩和していくにつれ、飢餓諦観・忘却ステージに入るが、それとともに今度は飢餓不安深層構造に対する不安注入が行われ、やがて飢餓不安深層構造は再び「安定期」に入る。しかし逆に、飢餓不安深層構造は常に安定を求めている故に、飢餓諦観・忘却プロセスが必要となる、という解釈も可能であろう。いずれにしても飢餓諦観・忘却は、深層構造としての飢餓不安「伏流水量」との間に補償作用関係を形成していることになる。

翻って、上図の欧州版（キリスト教文化圏版）はどうなるだろうか。まず、「飢餓不安深層構造」はこれまでの議論から導かれることとして存在しないが、それに代わるものとして「死恐怖深層構造」が考えられる。山折仮説からは、キリスト教文化圏における［生－死］の二ステージ構造を知らされたが、これに河田の「ペストによる精神構造への大きな影響」という仮説を加えるとき、下図のようなイメージが浮かび上がってくる。



この図でとくに説明が必要なのは日本型の図にあった「諦観・忘却」が、「記録・記憶」となっていること、また、同様に「飢餓不安」が「死恐怖」となっている、の二点である。まず、前者であるがこの辺の展開は前掲の外岡秀俊が論じるところの、西欧ペスト災害とそれを直視しながら「災厄を銘記・喚起して伝承の保水力を高めるという記録精神」[32] を位置づけたものである。倉持不三也によれば、ペストの常襲地帯であった欧州では、このような災害をただ単に恐怖の対象と見、現実を直視し人間の能力・知恵を最高度に発揮しながら災害と直面することによって、諦観としての天譴論を越えた[33]。この時「個人的な記憶を集団の記憶へと転化するのが「記録」の役割」であった。

一応説明としては納得させるものがあるが、ただ、災害を受け身でとらえていた段階から積極的に直面していくときの、そのエネルギーについてはもう少し釈然としないところがある。筆者としてはそのエネルギーは、宗教文化的［生－死］の二ステージ構造による、生と死のダイナミズム、つまり「飢餓」ステージのような“曖昧なステージ”と結合している“曖昧な不安”がもたらす「無決定性」といえる中性エネルギーと本質的に異なるものである。かくして、気の遠くなるような永遠の記録プロセスが始まり、それは丁度、数百年をかける計画で聖堂建築が続行されていくためのエネルギーに類似している。

翻って日本の現状、それもきわめて最近の大きな災害、平成５年大冷害と平成７年阪神・淡路大震災のその後を振り返ってみるとき、上述の西欧とのギャップの大きさに慄然とする。後者については外岡の完璧な仕事のなかで、日本における記憶・記録文化の未定着性を憂いているが、前者を考えるとき状況は深刻である。平成５年冷害「直後」、若干の農業・農業経済誌がルポ風の読みもの記事を掲載し、恒例のように地域試験場などから分厚い報告書が出たが、その以後本格的な学術研究は皆無であり、まさに「無記録・無記憶」文化社会の典型的事例となる[34]。状況は平安時代、江戸時代となんら変わりはない。

日本型と欧州型の深層構造が、前者では「飢餓不安」、後者では「死恐怖」となっているが、「飢餓」と「死」の対比は山折仮説に対応しており、説明は省くことができると思うが、「不安」と「恐怖」のセットについては説明しなければならない。パウロ・テイリッヒは名著『生きる勇気』のなかで、「人間は「不安」には耐えられず、それを「恐怖」に変換する」という命題を唱えている[35]。簡単に意訳すれば、「不安」というものは最悪の病的状態であり、対応策が無いが、「恐怖」にすることによってなんらかの対策が考えられ、行動できる、ということになろう。西欧型モデルについていえば、ペストの来襲は「不安」を越えているものであり、「死の恐怖」であったが、そのことによって逆に向かうべき対象が明確となり、人々の災害対抗力が醸成され、災害文化とまでいわれるものを創造するに至った。しかし、日本型モデルでは、「死」の前にある「飢餓」の存在のために逆に「恐怖」の形成には直結しないまま、「不安」という状態が構造化され、そのため目的意識を形成するには至らず、したがって打開策がないままとなった。

筆者は以上の論議を強化する意味で、ここでさらに、かなり無謀とも思われるような仮説を提示したい。この仮説がかりに否定されることがあっても、本稿の論理フレームワークには支障を来さない、という気楽さも手伝ってのことである。その仮説は、「日本の過去の大飢饉といわれるそれぞれのケースにおいて、多くの餓死者の存在が言われているが、事実は「死者」の数は言われているほどに多くはなかった。」というものである。

この点に関しては今後、とりわけ江戸期の飢饉史に関する再検討結果（があればの話）

などを探索しなければならないが、実はこの仮説が成立する可能性は決して小さくない、ということについていくつかの事実をあげることができる[36]。この仮説によって言いたいことは、近代化以前の日本では飢饉などの自然災害による「死」のケースはかなり低かったとすれば、それは西欧のペストと根本的に異なる状況を提供することになるからである。つまり［生－飢餓－死］という三ステージ構造において、「飢餓」と「死」との距離は従来考えられていたよりもはるかに大きいということであり、したがって「生」と「死」との距離は西欧のペストのそれよりも大きいということ、すなわち日本型では西欧型のペストのように「死」と背中合わせになっている状況とはおよそ異なるものであった。関連するが、キリスト教伝道のために日本にやってきたフランシスコ・サヴィエルなどが、当時の日本人のあまりの粗食ぶりに当惑と驚きを隠さなかったが、日本人の飢餓強さは西欧の住人には想像もつかない点があったのではなかろうか[37]。山折はさらに次のようにいう[38]。

「バテレンたちが日本人の食習慣の中にかいまみた粗食の生活の背後に、じつをいうと、飢餓的状況にわざとわが身をさらし、そこにあらわれる餓鬼的人間の地平をさらに越えていこうとする宗教的伝統が横たわっていたからである。」

6．飢餓耐久性問題

この用語は山折哲雄によるが山折はその内実についてはまったく触れてはいない。[39] しかし、筆者が異なる方向から思考を重ねてきた課題とまったく偶然的な一致が見られ、山折のやり残した重要かつ重大な課題について考察を展開する意義が明瞭なものとなった。

(1)　身体の飢餓と魂の飢餓

筆者は、「飢餓」問題を考察する過程において、「身体の飢餓と魂の飢餓」という対概念の導入を図ってきた。すなわち、これまでなにげなく述べてきた「飢餓」は、筆者によると厳密に言えば「身体的飢餓」つまりカロリー的飢餓を示すもので、これは動物的段階にも普遍的に見られるものである。しかし、ホモサピエンスに特有な「飢餓」は実はもう一種類存在し、それをとりあえず「魂の飢餓」と呼ぶことにしている。このような非カロリー的表現を「飢餓論」に取り入れることへの先入観依存的濃厚批判は十分予想可能なことである。その批判の多くは、恐らく「魂の飢餓」が一種のアナロジーで、「身体の飢餓」という実体的な対象を論ずるのと同じ領域内に位置づける方法論上の問題であると思う。しかし「魂の飢餓」はそのような形式的なものではなく、それなりの「実体的対象」を有している、という考えのもとで使用される。ともあれ、この種の「飢餓」を取り扱うことに

おいて、これまでの飢餓論と異なる「現代飢餓論」の役割、真骨頂があると信じている。

「魂の飢餓」あるいはこれの若干異なるヴァージョン自体は文学者や宗教者によってしばしば用いられたきた。とりわけ著名なケースとしてはフランスの実存主義文学者A．カミユの『ペスト』[40] に見られると思う。主人公の一人であるパヌルー神父が、ペストによって人々が虫けらのごとくに死んでいくなかで、とうとう無垢の子供が罹患するに及び、信徒の信仰が揺らぎ始めたときに説教する、という有名な場面で苦渋に満ちながら主人公が発した言葉であった。以下の考察上、どうしてもある程度宗教学的論議となってしまうが、これは必要最低限の言及であることを付言しておく。それほど長くないのでその場面の言葉を引用するが、彼は「子どもの苦しみは、われわれの苦いパンであるが、しかし、このパンなくしては、われわれの魂はその精神的な飢えのために死滅するだろう。」と言うのであった[41]。ここでいう「パン」については原典がある。人口に膾炙している言葉「人はパンのみにて生きるにあらず」の出所である「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という一節にあるものである（マタイによる福音書四章四節）。イエスが荒れ野で四十日間断食した後、神の子ならこれらの石がパンになるように命じたらどうか、と誘惑した悪魔に対して言った言葉である[42]。つまりパヌルー神父の「食べなければならないパン」というのは、聖書にある「神の言葉」を意味するものであり、無垢の子どもすらペストのために死ぬ運命にあることを直視し、信仰を失ってはならないと（自身に対しても）必死で説いたわけであるが、実は聖書にもっと直接的な表現がある。通常あまり引用されない個所であるが、旧約聖書アモス書の次の一節である。

「見よ、その日が来ればと主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく水に渇くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ」（アモス書8:11）。

この文章は、「飢え」つまり「飢餓」が、通常のパンからの「身体の飢餓」と異なるもうひとつの「飢餓」について明瞭に書き記している。旧約の時代では人々は、身体の飢餓と、もう一つの飢餓である魂の飢餓については当然のように考え、両方のパンを必要としていたのであった。当時は日常的に信じていたこの２種類のパンが、歴史的過程において忘却されてしまったのは、進歩というべきなのか。しかし筆者が「身体の飢餓と魂の飢餓」と言う場合、人間にとって必要な食料は身体への食料と神様の言葉という食料である、と単純に言うのではない[43]。人間を人間たらしめているものに「身体と魂」の両者があり、両者が健全でなければ人間性を喪失するという場合、これは例えば食料問題の命題としては範囲外である、といえるだろうか、という問題を投げかけたい。人間の身体と魂の二要素

はいずれもコンスタントに“滋養”を必要としており、しかも両者はやがて後ほど説明するように独立的ではあり得ないとすれば、飢餓論としてこの「二種類のパン」を考えることを避けることはできない。このような論理フレームワークはやはり分析的ではなく、近代科学の方法から距離がある、という批判が依然としてあるならば、ここでは「総合的飢餓論」を論じようとしていること、いわゆる「分析的方法」を意識的に避けている、と答えたい。しかしなお、このような「総合性」は、この種の食料問題には入れるべきではない、というのならば、“入れるべきでない”という価値判断がそこにすでにあるわけである。「魂の飢餓」は、分析主義的批判にとっては葦よりもか弱いものであるが、しかしこの弱い葦、「魂の飢餓」をそれ故に切り倒すならば、居残る飢餓論は、まさに骨と皮ばかりに痩せ衰えた、飢餓状態の飢餓論となるであろう。

しかし、依然として「魂の飢餓」にまつわる曖昧性は取り除かれたとは言い切れない。もう一度原点に戻ろう。まず魂が飢餓に陥るとは「魂への食料」の不充足である、そして「魂の食料」の原義は「神の御言葉」であるが、この原義に拘泥する理由はなにもない。原義に加えて現実的にはその転義として「人間性を維持するために必要な非物質的インプット」というおさえかたが、and/orとしてあると考えられる。したがって、

<u>原義</u>　魂の非飢餓状態：神の言葉が吸収されている状態つまり信仰がある状態
　　魂の飢餓状態：神の言葉が吸収されていない、つまり無信仰状態
<u>転義</u>　魂の非飢餓状態：人間性を維持する非物質的インプットがある
　　魂の飢餓状態：人間性を維持するための非物質的インプットがない
<u>魂の非飢餓状態</u>　原義：神の言葉が吸収されている状態つまり信仰がある状態
　　転義：人間性を維持する非物質的インプットがある
<u>魂が飢餓状態</u>　原義：神の言葉が吸収されていない、つまり無信仰状態
　　転義：人間性を維持するための非物質的インプットがない

という整理が行われる。

まず、「原義」は西欧キリスト教文化圏より発している、「魂の飢餓」は無信仰によるとはいえ、積極的で主体的な無信仰であり、「無関心」ではない。一方、仏教文化圏においては「原義」はありえず、転義すなわち「人間性を維持するための非物質的インプットがない」によるしかない。つまり転義においてはもモラルあるいは倫理的レベルの問題とならざるをえない。したがってこのケースでは、あえていうならば「魂の飢餓」状態のイメージとしては“in moral”、つまり「道徳的・倫理的に不健康な状態」ということになろう。

(2)　飢餓の三角形構造

人間の飢餓に関する「三角形構造」を以下で示したい。それは、「人」を頂点におき、さらに「身体のパン」軸と「魂のパン」軸からなる三角形構造である。

図1は状況が「正常三角型」として表されているが、この三角形の面積は人間の豊かさH、を示す。図2は富める国の飢餓の状況、特に日本型を想定したが、人間が人間としての豊かさを保持できるパンの量を下回って、パン軸のマイナス方向（「ヒト」の方向）にその量が減少する様子を示す。この時、必然的に魂のパンも減少し、図3となる。なぜか。現在の日本を考えるとき、現在の「魂のパン」の摂取量水準が「本来の魂のパンの量」水準以下の状況で身体のパンが減少するとき、「パニック」という相乗効果が更に作用し、S1の位置まで魂のパンの摂取量は減少してしまうことを意味している。一方、図4は貧しい国と言われている国における状況を示している。ここでは身体のパンの摂取量が少なく、飢餓状態にあるが、豊かな国よりも身体のパンが低い水準にあるにもかかわらず、文化と情熱、そしてある場合は信仰によって、三角形面積Hはそれほど縮小しないのである。

次に図5で示してあるのは飽食のケースであり、身体のパンがプラスの方向にB2まで増大するが、魂のパンはそれ以上の減少率で減少してしまい、図6のような状態に終わってしまうだけではなく、むしろ飢餓の構図（Ⅱ）のH量よりも少なくなってしまう結果さえもたらすこともあるのである。「魂の飢餓」は本稿ではとくに宗教的意味を持たないという前提だが、明治維新以降どうやら持続していた一定の精神的軸も消え、もともと信仰とは縁の薄い国ということにおいて、魂の飢餓状況は進行中というふうに見ざるをえないところがある。そしてなお、前述のように「不安の国」日本という現状は、この飢餓状況をさらに強めているものとしてよいだろう。

(3)　山折・樋口論の結合

仏教文化圏とキリスト教文化圏に関して、前者では三分割構造〔生－飢餓－死〕、後者では二分割構造〔生－死〕という構造を構築したが、ここでの「飢餓」はわれわれの用語でいう「身体の飢餓」であった。しかし、今、「魂の飢餓」というもう一つの「飢餓」を導入した段階に入り、これらの関係を全体的に見直さなければならない。

	山折	樋口	結合
仏教：	生－飢餓－死	身体の飢餓	生－〈飢餓〉－死
キリスト教：	生－死	魂の飢餓	生－｛飢餓｝－死

となるが、二種類の飢餓はそれぞれ「身体の飢餓」＝〈飢餓〉、「魂の飢餓」＝｛飢餓｝と表記してある。この要因を先に検討した「構造5」に導入し、「構造6」となる。

図1　正常三角形

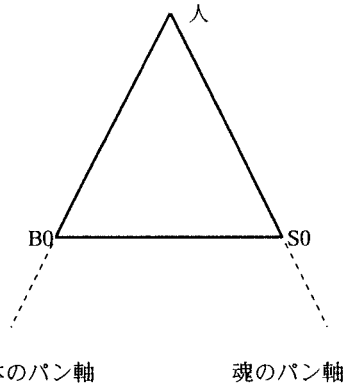


図2　飢餓の構図（Ⅰ）

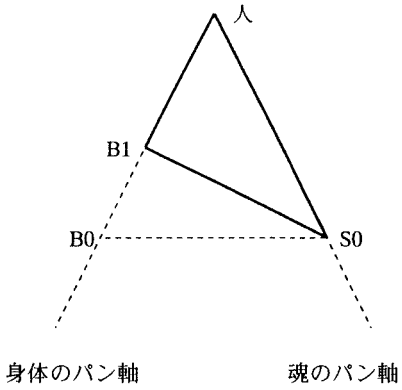


図3　飢餓の構図（Ⅱ）

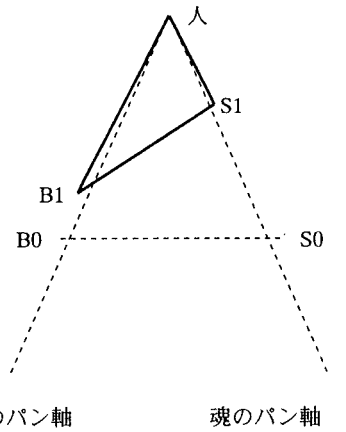


図4　飢餓の構図（Ⅲ）

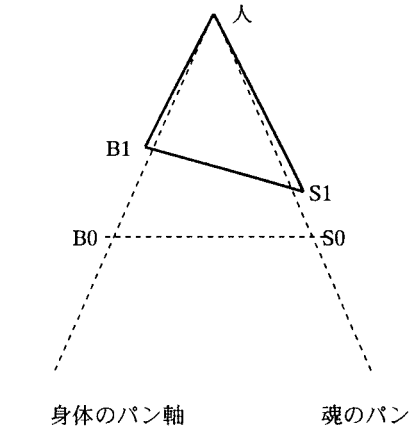


図5　飽食の構図（Ⅰ）

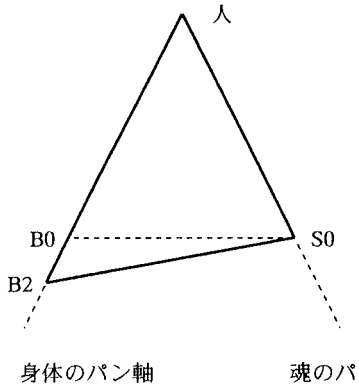
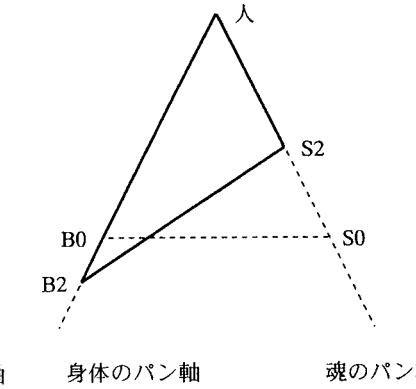


図6　飽食の構図（Ⅱ）



構造６　　二種類の「飢餓」を導入した飢餓論的構造

［日本・自然災害・〔生－〈飢餓〉－死〕］

［西欧・ペ ス ト・〔生－ {飢餓} －死〕］

(4)　飢餓耐久性に関するさまざまな分析的用具

この構造の意味を改めて吟味してみよう。しかし、飢餓耐久性というまったく新しい問題に切り込むためには、さらに新たな方法論的な舞台づくりが必要となる。それは結局は、飢餓耐久性という観点から日本型と西欧型に関する仮説的命題を提示することと、そのための前提としての諸問題、とくに「飢餓生起蓋然性」、「飢餓頑健性」そして「飢餓回復性」などの諸概念の準備である。ごく基本的な性格規定だけにとどめ置くことになろう。

１）飢餓頑健性robustnessと飢餓回復性resiliency

この頑健性robustnessと回復性resiliencyは、環境問題や災害問題で使われるマクロのコンセプトであるが、飢餓耐久性を検討するに当たって、有益な概念であるため、導入したものである[44]。たとえば食料安全保障問題の文脈では、十分すぎるほどの在庫量を常備しておき、一方ハード機構の整備による災害抵抗力、輸入メカニズムの整備などの方策によってその頑健性robustnessは高いレベルにあるが、経済的コストがネックとなる。

しかし、このような方策は「身体の飢餓」に対してはそのまま有効であるが、われわれは「魂の飢餓」についても考えなければならないのである。この観点では、飢餓頑健性は宗教文化のあり方あるいは一国の道徳的・倫理的状況がそのレベルを支配することになるだろう[45]。しかし、「魂の飢餓」頑健性は、「身体の飢餓」頑健性とは独立ではあり得ないのは明白である。後者における頑健性は、前者の頑健性上昇に著しい効果を発揮することになる。一方、回復力であるが、「魂の飢餓」の場合ほとんど悲観的にならざるをえない。

２）飢餓生起蓋然性

飢餓が生起する可能性問題は、あきらかに上述の飢餓頑健性に依存しているが、とりわけ「身体の飢餓」についてはほとんど明瞭であろう。一方、「魂の飢餓」は「身体の飢餓」に依存し、相関する関係があると同時に、独立的要素も考慮に入れなければならないのであり、「身体の飢餓」が発生すれば即座に「魂の飢餓」に連動するとは限らない。たとえば、アイルランドの大飢饉の場合、「魂の飢餓」とそれによる人間崩壊現象は想像以下であることが知られているのであり、この点に関する限り、やはり「魂の飢餓」頑健性の水準が強く影響を及ぼしてくるといえようかと思う。

３）飢餓耐久性の優位性・劣位性

仮説的命題は以下の通りである。「日本型飢餓耐久性とは、相対的耐久性という意味では、「身体の飢餓」に対する優位性と「魂の飢餓」における劣位性である。一方西欧型では「魂の飢餓」における優位性と「身体の飢餓」における劣位性である」。

「身体の飢餓」の優位性・劣位性についてはごく単純に、物質的なカロリー不足による「身体の飢餓」状態における、抵抗性の優劣を示しているものである。しかし、「魂の飢餓」の優劣についてはそう簡単ではない。先に「魂の飢餓」状態の原義と転義の具体的イメージについてすでに述べているが、結論的には、原義による「魂の飢餓」は確信犯的無信仰状態を、また転義においてはimmoralな状態ということであった。そうするとこのような意味において「魂の飢餓」における飢餓耐久性の優位性、劣位性の問題は、確信犯的な場合の方が、やがてパニックに連動しやすいimmoralな状態よりも優位にあるということになる[46]。以上のような前提のもと、日本型と西欧型について検討してみよう。

まず、「身体の飢餓」から始めよう。その耐久性があるというのは日本の歴史における「飢餓」訓練であり、前述のフランシスコ・ザビエルの手紙にもあるような日常的飢餓体験がその基礎にあった。翻って今日の日本においての「飢餓不安」はこの仮説と逆の状態を示すものではないか、と考えられるかもしれない。しかし、飢餓不安はある意味では常なるそのための準備、と考えることもできるのである。しかもフランシスコ・ザビエルの日本人と現在の日本人の大きな共通点がほかにあり、それは西欧水準よりもかなり低い低摂取カロリーのあり方である。これらの要因を総合的に勘考するならば日本型の身体の飢餓優位性は揺るがないように思う。一方、西欧文化圏における「身体の飢餓」訓練の不足は明らかであり、耐久性において劣位と考えられる。

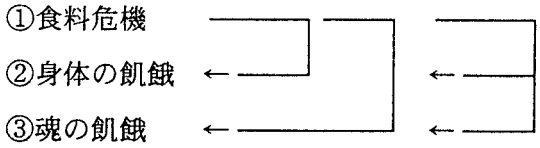
次に「魂の飢餓」に移ろう。西欧文化圏では、この問題にまつわる素養は歴史的学習によって十分であることによって、「魂の飢餓」は積極的無信仰によるものとなり、いわば確信犯であってそこに曖昧性はない。一方、日本人の歴史において「魂の飢餓」という観念は育たなかったが、それはなによりも仏教文化圏の特徴であった。「餓鬼」は常に「身体の飢餓」に関わるものであり、およそ原義的な「魂の飢餓」との接点は見られなかったのである。従って前述のように、原義によるのではなく、転義によることになり、結局“immoral”状態を示すことになる。このような対照から、「魂の飢餓」耐久性については、西欧文化圏における優位は動かないものといえる。

(5)　飢餓耐久性の仮説的数量分析

本稿でこれまで検討した飢餓耐久性と関連する諸概念は、そのほとんどが従来見ることがなかった「非慣行的概念（変数）」であり、筆者が示そうと意図している全体像の把握に

一般的な困難があるのは理解できるところである。その理解の一助となることに関心を払おうとして、不十分を承知の上であえて数値的仮説例を提示することにする。したがってここでの「数値」の絶対値は何らの根拠を持たないものであること、若干数値の相対的関係に意味を持たせようとしたが、今後この種の検討が深まることに期待する意味がある。

ここでのモデルは、下図のような構成からなっており、まず「食料危機」が発生するが、それは上述の「飢餓生起蓋然性」つまり一定の確率のもとで起こるとする。逆にいえば、飢餓状態をもたらすような食料危機発生の確率である。それをPcとする。次に、身体の



飢餓耐久性をPfという確率で示し、同様に魂の飢餓耐久性をPsとする。それぞれに仮説的数値を与えたものが

	身体飢餓耐久性Pf	魂飢餓耐久性Ps	飢餓発生Pc
日本	0.6	0.3	0.04
欧米	0.4	0.6	0.005

となる。これらの数値は先に検討した飢餓耐久性の優位性・劣位性の結果をもとにしてあるが、次にこれらの数値をもとに身体飢餓非耐久性と魂飢餓非耐久性をそれぞれつくり、あとは単純な確率計算によって「パニック度」を導いたものが下表である。

	身体飢餓非耐久性1-Pf	魂飢餓非耐久性1-Ps	飢餓発生Pc	パニック度 身体 (1-Pf)Pc	パニック度 魂 (1-Ps)Pc
日本型	0.4	0.7	0.04	0.016	0.028
欧米型	0.6	0.4	0.005	0.003	0.002

結果的には日本型と欧米型では、パニック発生という点で大きな差が生じているが、その主要な要因は飢餓発生確率によっており、したがって得られた結論はあくまでも単なる参考例にすぎないということを繰り返して述べておくことにする。

7．むすびとして

本稿は現代飢餓論として、食料政策領域と部分的に重合しながら、これまでの食料政策論が意識的あるいは無意識的に立ち止まらなかった、豊穣な成果が約束されているとはいえデリケートな土壌からなる領域に入ろうとしたものである。しかし、繊細な土壌にはそれにふさわしいハンド・メイドの工具が必要であった。

現代および未来の「飢餓」はたんなる食料需給の重大なインバランスだけでなく、フードシステムとプロセスの進化と、それと関連あるいは無関連的に多様化した「飢餓」という側面をも持つものである。この側面は、「食料問題」の一環に位置づけることは必ずしも不可能ではないが、慣行的な問題意識と方法論の中に埋没してしまう可能性もまた大きく、あえて現代飢餓論と銘打つ理由の一端がそこにあった。“famine（飢饉）という言葉は特別な意味がある”というニュアンスの発言があることについては前述したが[47]、日本版とすれば“飢餓、という言葉は特別な意味がある”となる。この言葉の魔力に迷わされずに、この言葉のもつ人類史的重みを大切にしなければならない、という実感である[48]。

注

1）ちなみに「飢餓」あるいは「飢え」だけにこだわり、その言葉がタイトルに含まれているおおむね最近の著作をリスト・アップしてみる。H.ヘルマン『飢餓からの脱出』（佑学社、1974）、鈴木喜代春著『飢餓の大地』（鳩の森書房、1977）、J. S. カナール・J. C. ムーシェル『現代の飢餓』（蒼々出版、1977）、S. ジョージ『なぜ世界の半分が飢えるのか』（朝日選書、1984）、今村奈良臣・吉田忠編『飢餓と飽食の構造』（農山漁村文化協会、1990）、荏開津典生著『「飢餓」と「飽食」』（講談社選書メチエ、1994）、森島賢編『世界は飢えるか』（農山漁村文化協会、1995）、レスターブラウン著『飢餓の世紀』（ダイヤモンド社、1995）、樋口貞三著『身体の飢餓と魂の飢餓』（筑波書房、1998）などでその他にもいくつか検索できる。

2）例えば食料危機論のバイブルともいうべきレスター・ブラウン著『飢餓の世紀』（ダイヤモンド社）の原題はFull House: Reassessing the Earths Population Carrying Capacity

3）著作内容はいいが、例えばP. H. アベルソン編『食料危機：その解決策を探る』（日本経済新聞社）の原題は“Food: Politics, Economics, Nutrition, and Research”である。

4）A. Senはstarvationとfamineの区別を示すにあたってバーナードショーのドラマの対話を引用している。（A. Sen, Poverty and Famine, p.40）
M：私の父はあの暗黒の47年にstarvationで死んだ。多分、あなたは聞いたことがあると思うが？
V：あのFamineのこと？　M：違う。Starvationのことだよ。一国に食料が満ちていて、輸出しているというときに、famineということはあり得ない。My father was starved dead・・。

5）食料供給異常事態に対応した、詳細なシミュレーションが試みられている。『食料・農業・農村基本問題調査会答申』および『同参考資料』、1998年。

6）日本では「飢饉」や「凶作」という言葉が特別なフィーリングを与えると同じ様な意味でfamineは別格らしい。N. Dowerは“何故、famineは我々に特別なモラル的なアピールを与えるのだろうか？”などといっている。Nigel Dower, ‘A World without Hunger: An Ethical Imperative’ (O'neill, H. and J. Toye ed. “A World without Famine?”. p.25, p.32

7）Dreze, J ed, The Economics of Famine, Edward Elgar. 1998年末現在未出版

8）注5のH. O'neillの編著
9）C. Morash, Writing the Irish Famine, Oxford University Press, 1995など。
10）注3）前掲書
11）例えば、『角川　国語辞典』
12）昭和初期冷害の詳細は例えば、無明舎出版編『新聞資料東北大凶作』、無明舎、1991
13）例えば、小野武夫著『日本近世飢饉誌』（学芸社、1935年）、中島陽一郎著『飢饉日本史』（雄山閣、1976年）、雄山閣編『江戸時代の飢饉』（「歴史公論8」、1976）、秋田県編『大正二年・大正三年秋田県凶作震災史』（秋田県、大正7年）、福島県編『昭和二十八年冷害凶作誌』（福島県、1956年）。
14）「食料問題」と「食糧問題」などにみられる食料と食糧の相違については、厳密に区別せずに特別な場合を除き、「食料」表現で一貫する。
15）T. Shultzeの定義による。
16）この表現の反証材料については十分とは言えない。
17）注1）レスター・ブラウン著前掲書
18）荏開津典生前掲書、講談社メチエ選書。山折も賞賛しているように、最近の「飢餓」を取り扱ったものとしては明快さとアイデアの点で抜群の著作である。
19）山折哲雄「「飢餓」について－2つの立場」、（梅原猛編『新たな文明の創造』、講座文明と環境第15巻、191-200、1996）
20）山折、前掲書、p.195
21）山折哲雄「飢餓と癒し」、宗教研究70巻308号、1-24、1996
22）山折、前掲論文、p.2
23）山折、前掲論文、p.22
24）地獄、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人道、天道。源信『往生要集』岩波文庫（上、下）
25）河田恵昭著『都市大災害：阪神・淡路大震災に学ぶ』（近未来社、1996年）
26）注25）河田前掲書。また、倉持不三也は「メタフォリックな社会的病理としてのペストは依然として現代社会に蔓延し、人間ひとりひとりの心のうちに、いわば加虐の志向として潜んでいる」といっている。倉持著『ペストの文化誌』（朝日選書、1995）、p.365
27）クラウス・ベルクドルト著『ヨーロッパの黒死病：大ペストと中世ヨーロッパの終焉』（国文社、1997年）、p.321
28）注21）山折前掲論文
29）外岡秀俊著『自身と社会（上、下』（みすず書房、1998年）
30）注29）外岡前掲書、p.715、p.726。原典は三浦朱門。
31）河田前掲書
32）外岡前掲書、p.726
33）アイルランドの大飢饉の際にもよくいわれたことだが、これは天罰である、という意見がかなり蔓延した。
34）阪神・淡路大震災関連の農業調査報告書として、農林水産省中国農業試験場監修『都市型災害と農

業・農村』（農林統計協会、1998年）。平成５年冷害については、農林水産省東北農業試験場編集『東北地域における平成５年冷害の記録』、1995年３月。同じ年次で類似書はいくつかの県で出されたが、これ以降研究書は見あたらない。

35）P．テイリッヒ『生きる勇気』（講談社現代ライブラリー、1997年）

36）筑波大学佐藤常雄教授（『貧農史観を見直す』、講談社現代新書、1995、の著者）からの聞き取りによる。また、『図書新聞』1999．1．1に、網野義彦と田中優子両氏の興味深い対談“海の交通、布の交通：江戸時代の海・村・農をめぐって”が掲載されている。

37）山折前掲論文、p.20

38）山折前掲論文、p.21

39）山折前掲論文、p.22

40）A．カミユ『ペスト』、新潮社、カミユ全集４、1972年

41）注37）カミユ前掲書、p.182

42）マタイによる福音書以外にもルカによる福音書にもあるが、その原典は申命記にある。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。（ルカによる福音書4:4）「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたの先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。（申命記8:3）

43）樋口貞三著『身体の飢餓と魂の飢餓』（筑波書房、1998年）

44）例えば、Rosenzweig, C. and D. Hillel, “Climate Change and Global Harvest”, Oxford, 1998にくわしい。p.234, p.246-248。計量経済学では計測数値の安定度として用いる。

45）もちろん一党あるいは個人独裁的体制においても飢餓頑健性は維持可能であることは中近東や朝鮮半島の一部の国の状況から知ることができる。一方、アイルランドの大飢饉の場合、魂の飢餓頑健性は想像以上に高かったが、これはやはり「原義」的水準の高さによるものであろう。この大飢饉をめぐって、現在見直し論が展開されているが、堅実なのは大飢饉の経済学者のCormac O Grada “The Great Irish Famine”, Cambridge, 1995, “Ireland: A New Economic History 1780-1939”, P. O'Sullivan ed. “The Meaning of The Famine“, Leicester Univ. Press, 1997、などが参考になる。

46）平成五年の米騒動時の“獲得パニック”については、「心理的リアクタンス説」を適用した分析として、蜂谷真「平成の米騒動」、流通科学６号、p.31-40があるが、これは1973年のトイレットペーパー・パニックを考察した、宮崎義一『新しい価格革命』（岩波新書、1975）を準用したやや記述的分析である。

47）注６）N.Dowerの言葉

48）例えば辺見庸『もの食う人々』（共同通信社、1994）に記されてある、強烈な身体の飢餓の現実があっても、魂の飢餓が問題となるのか、と脅かされてもである。